

冬

物語 新宿 2021～2022

笠井和明

冬の日の東京都心、

とあるターミナル駅。そこへ毎朝通うわけではないのだが、時折、その再開発され続けているきらびやかな駅を通る。その、工事中のフェンスの片隅に丁度良いスペースがあり、そこに路上のおじさんが寝ていたり、座って居たり、居なかったり。

朝、通勤時間帯、エスカレーターに乗り、その場を見つめていると、今日は居た。

起きていれば声でもかけてやろうと思って、ずっと見続けていると、いかにも通勤途上のうら若き女性が、そっとそこへ近寄り、のぞき込み、そして何かを置いていった。時間にしてほんの数秒。

エスカレーターを降り、自分もまた、そこをのぞき込んでみると、毛布の上に「メロンパン」が一つ置いてあった。

団体とか教会であれば、勧誘のチラシが置かれているのであるが、それもない。単なる知りあいか、わざわざそのために買って来たのか、たまたまなのか？

喧騒の中、そのおじさんは、そんなことも気付かず、毛布を頭からかぶりぐっすりとお眠りしていた。

その後、どうなったのか、弥次馬根性で、その地点を気にかけているのであるが、その日以降、その場所に、そのおじさんは居ない。「メロンパン」がその場から出るきっかけになったのか、

何がきっかけになるか、分からぬ世界だけに、そんなことも夢想してしまう。あなたの「メロンパン」がおじさんの命を救いましたと云うと、とても大袈裟になるが、命は救わないとしても、何となく社会の優しさに触れられたのだと思えば、それは、きっと何かになったのであろう。

そう云うさりげない「善意」は、殺伐とした東京が、「コロナ」のせいでますます殺伐、暗澹化している中、何か、形でないものを信じてしまいそうにもなる瞬間である。

まあ、こんなことは良くある。誰も見ていないだけである。

新宿でも夜中、仲間が横になるために集まる場所では、その時間帯のためにわざわざ来たのであろう、枕元にパンやら、手作りのお弁当やら、お菓子やらが置かれ



ていることがある。個人か、グループか、ただ、路上の人々が心配で来たものである。

この冬も、昔の知りあいからの電話で「どこそこ」に「心配な路上の人がいるから見ておいてくれ」と依頼された。「何も持っていなかったからお金を置いていった」とのこと。「幾ら」と聞いたら「一万円」。まあ、それだけ貰えば、そのおじさんはどこか別の場所で暖を取っているだろうと、実際、行って見たけれども、そこには、まあ、居ない。

この冬も多くのお米、防寒着衣類、毛布を大量に頂いた。お米は2トン程度、防寒着類は1000箱程度（一箱平均10着程度で、およそ一万着）、毛布は800枚前後、マスクは数万単位などなど。と、どこも足の踏み場がないくらいの数量で、整理するのにも多くの時間を費やし、誠に嬉しい悲鳴となった。その大半が個人の方々からである。

旦那さんが亡くなって、息子さんが亡くなって、引越をしなければならぬなど色々な事情の中、不要になったものを役に立ててと、同封のメッセージが添えられているものも多い。大切な遺品などを路上の仲間に提供することが供養になるのかならないのか、古着は古着なのであるが、その物語を知ってしまうと、何とも切ないものはある。そして、その思いを衣類をもらう当事者になかなか伝えられず、申し訳なくも思う。

現金の寄付も今期も大きな団体からの寄付はなく、すべて個人や、小規模事務所であるとか、小さな会社であるとか、そんな市井の人々からの浄財であった。

今や、このような無名で無垢な「善意」の人々の力で路上の人々は支えられてもいるのかも知れない。

都心では、路上生活者の数も減って来た。なので、かつてのような人がわんさか集まることも今はない。寝ている場所も分散をし、その集住地域が、地域で問題になることも少なくなった。

こう言う小さな「善意」の集合が積み重なっていけば、何とか（少なくとも飢え死にはせず、凍死もしない）なるような人数ではある。

まあ、ようやくそう言う時点にまで行き着いたのか、今は「コロナ対策」で、どこそこかに住民票を置いてあれば、幾ばくかのお金ももらえ、その時だけは路上には居なくなる。カプセルに入ったり、サウナに入ったり、漫画喫茶に入ったり、と、ターミナル駅等の繁華街は、金さえあれば、暖を取り、隠れる場所もある。

飯も、教会などの炊き出しを回れば、それはそれで何とかかなる。防寒着や毛布やホカロンなど防寒用品もあちこちで貰える。風呂もシャワーサービスを利用すれば、

どうにかなる。

あとは、煙草銭、酒代、幾許かの娯楽費でもあれば、それはそれで生活は成り立つ。

これらの「善意」は、きっと「対策」にとっては、悪い方（「依存」「路上の固定化」）に結びつくのであろうが、「共助」と言う視点に立てば、同じ立場、階層の人々への助け合いでもある。

まあ、色々な手を使い、色んなものを活用しながら生きていくのが底辺の人々の術であり、そこに善悪は存在しない。同情を武器にして世間を騙したとしても、それはそれで「あっぱれ」であり、騙されたとしても、それはそれで笑って許すのが、この世界の暗黙の了解みたいなところがある。

私たちが見る風景は、色々と変わっているようで変わらない。それなりに目立つところで寝ている人々は、そう言う「善意」があるからそこに居るのか、それともそう言う「善意」が引き寄せられるのか、それは本当のところは、よく、分からない。今や「ホームレス問題」「路上生活者問題」を、現場に来ずともステイホームで簡単に「検索」し、「納得」している人々がとても多いのであるが、実のところ、それが、どの時代の、どの地域の「事実」なのかと云うことには目をつぶり、何か分かったような気になり、興味を終えてしまう。まあ、終えてしまっても良いのであるが、その裏で実際の路上生活の人々は、日々の生活を営んでいる。その現実に触れることなく、まるで別の世界を語るかのよう、論じられるのが、ホームレスと云う存在のようである。

そんな中、新型コロナウイルス流行の第5波（デルタ株）が何となく終わり、大騒ぎにして経済を止めてしまった「非常事態宣言」もようやく解除され、「さあ、これから復興だ」的な雰囲気の中、（第6波（オミクロン株）の姿がまだ見えぬ時）またもや冬となった。

冬になって、「コロナ渦」で家賃を払えなくなったり、生活費に困った人々は、役所の「生活困窮者相談窓口」に行きはするが、路上には来ない。つまり、住む場所があり、暮らしがある。

経済が悪くなれば、人々が簡単に失業し、そのまま路上に来るかのような危機感がどこかあったが、そんな型通り、流行りのよう、路上生活にはならないものである。

「墮ちる時はいつも一人」である。一人でもがき苦しみ、死ぬか生きるかを必死で選択し、世間体など気にせず、逃げるように墮ち、行き着いたところが路上。そこには仲間が居た。仲間が居たから生きて来れたのである。

若い人々の場合は、事情は様々であるが、育った家を出、一旗揚げようと思ったり、何となく流れ着いたり、これまた色々な困難があり、思ったように上手くは行かず、けれど都会の片隅では何かと雑仕事もあるので、どうにか生きて来られた。好きで路上生活をやっているのではない。そこしか選択肢がなかったから、その暮らしになっただけである。

今回は、「コロナ渦」と云うことで、「生活困窮者自立支援法」の枠組みがかなり生き、東京都も特別区も社会福祉協議会なども、住民をホームレスにさせないため、住宅費の補助や、生活費の貸付などかなりの対策をとって来た。

これらの対策がうまくいったのか、いかなかったのかは、これからの評価になるだろうが、こと、路上生活者に関しては、この2年増えてはいない。微減であるが、減り続けている基本トレンドには変化はないので、うまくはいつているのであろう。

「生活困窮者」と云う用語はかなり幅広く、中間層のどんな人々にでも当てはまりそうであるが、「路上生活者」とは、そのものずばり、家がなく、路上に住まざるを得ない人々のことであり、「ホームレス」とは広義に解釈しても、追い立てられているだとか、極端に不安定であるとか、その恐れのある人々である。

「コロナ渦」は、路上生活者を増やしはしていないが、飲食店、サービス業、旅館業とそれに関連する人々が営業自粛などの規制等を受けたことにより経済的に打撃を受け、「生活困窮」となってしまった人々が多く居る（あまりにも対象が広いので「補足」はなかなか難しいが）。と云うのが事実のようで、その路上との混乱が色々なところで起きてはいるが、当の「路上生活者」は、そんなことは知ったことではないし、あまり違う階層の仲間が増えるのを好まない傾向もあるので、俺らは俺らで、いつも困っているのだから「コロナ渦」なんぞ関係ないわと云う立場の人々が多く、「コロナ渦」の様々な対策、とりわけ「ネットカフェ難民」と呼ばれている、主に稼働層の若年層向けの対策を利用してしまえと云う人々は、新宿ではあまり居ないようである。そこまでの就労意欲は、もう歳を取ると薄れてしまうものである。

往時と比較すれば、路上生活者は都心において少なくなった（東京の数字の事実、その主流は河川敷などでの仮小屋で暮らしている人々となる）。新宿などでは千人台が百人台へと桁が一桁減った。こう云うことをあまり認めたくないような人々が一部には居るが、これは概数調査でも実数調査でも実態調

査でも巡回相談でも、自立支援センターへの入所属性の変化などからも、客観的な事実である。私たちのこの冬の夜間パトロール活動で把握した新宿の全体数（実数）は平均値で127名。都の概数調査以前から行っている歴史ある調査なので、精度に関してはそれなりの自負はあるが、この調査でも前の年から約40名は減っている。

その原因は色々あるだろうが、どこか別の場所に移動したとか、移民になったとか、そう云うことはない。往時の東京を知らない人々は分からぬだろうが、実感として、どこもかしこも「見事に減っている」のである。少なくともそれを前提に、今のホームレス問題と言うものを語らなければならないのであるが、そこもまた世間の見方は混乱しているのか、同じようなことを、同じ規模でやっているから、「逆進性」のようなものが起こり、自立支援センターに路上歴のない若者が多く入所し、結局は両者混合の施設になるとか、大きく宣伝している団体の炊出しに住所がある一般の人々が、出来あいの弁当なら良いやと殺到し、当の路上生活者がしかめ面をするなんてこともある。

それはそれで仕方のないことであるが、出来あいの弁当を買って、出して、それを「炊き出し」と言うなんて、何だかお里が知れているような気がするのであるが、そんな、なんか違うよなと云うことが、「コロナ渦」の中、多く見受けられる。

そんなこんなで、今期の冬は路上生活者にかなり限定した取り組みを意識的に行った。他の「コロナ渦」の「生活困窮者」と呼ばれている人々や若者も、もちろん対応はしたが、コロナであろうがなかろうが、路上生活を続けている仲間が、無事にこの冬を越すことに、意識的に集中した。

そもそも、路上生活者への支援は何かと云えば、当座の生活の下支え（過酷な環境下で、その場で死んでしま



ったら元も粉もないので」と、家がないのだから、フォーマルでもインフォーマルでも住む場所の提供や獲得、そして仕事（雑仕事でも何でも）、年金なり、生活保護なり、定期的収入の獲得なり補填。加えて孤独にならぬような仲間作りである。

「対策」として考えてもそんなに難しい話ではない。

そして、それぞれ難や課題はあったとしても、既に東京都の「路上生活者対策体系」としてでき上がっている（石原慎太郎元知事が先日お亡くなりになったが、石原都政の時代にこれらの体系は既に出来上っていたことは、あまり知られていない）。

それをコツコツと、多少の修正を試みながら、どこまでやっていけるのが、今の課題である。

「対策」があると、そこをを行ったり来たりする仲間の層ももちろん居るし、そんな「対策」など必要ないと嘯く仲間も居る。相対的に「対策」を利用する仲間よりも、後者の仲間の方が今は多い。要は「今のままで良い」とする人々の列である。まあ、それこそ河川敷などで、一定の生活を維持している人々の多くはそう云うのであろうが、新宿など繁華街組も、何となく生活が成り立ってしまっているの、近年はそうになっている。

それはそれで、その人の意思を認めるしかない。昔の狩り込みではないが、無理やりトラックに乗せたり、無理やり収容所に入れたり、無理やり生活保護にさせたりしたとしても、それは「地面」は綺麗になるかも知れないが、それだけではないだろう。人の対策なのだから、人が幸せにならなければと、云うか、頑張ろうと思えるようにしなければならない。そのために本人の意思と云うのは、最大限、尊重せねばならない。もし、他に歩きたい道があるのであれば、その道を計画し、そして実際に、掃き、作るのが我々の仕事でもある。

そうなると、当座の生活の下支えが軸になる。全体がどうなのかは、結構、地域地域で違うとは思っているのであるが、こと、新宿では、そのようである。

冬の間は防寒物資との格闘でもある。前述した通り全国から大量に頂いた毛布、寝袋、防寒着などを捌き、運搬し、配る。回る。この循環の中で冬が終わったと言っても過言ではない。回ると言っても、かつてのよう一ヶ所にずっと居る訳ではなく、皆、それぞれのお気に入りの場所に居たりして、地域分散傾向なので、足が棒になるとはこのことで、スタッフ全員ひいひい言いながら、新宿の街を歩いた。

こうやって歩くと、常連の仲間だけではない新たな出会いもある。こんなところで寝ていた

のかと云う驚きもある。ビルの谷間と云うのは面白いもので死角（目立たぬ場所）と云うものがあちこちにある。ガードマンやら警官やらが大目に見てくれる場所もある。

まあ、例年より寒い冬ではあったが、年末年始は新宿区の協力もあり（年末年始の諸対応は新宿区は率先してやって頂き、大変助かった）、それなりの拠点が確保できたこともあり、炊出しも出来、暖かい昔ながらの「労働者飯」を共に食うこともでき、皆で餅をついたり、酒を飲んだり、毛布の中で語り合ったりと、どこか懐かしい、そんな越年が出来た。病気の人も少なかった。皆、無事ではなかったとしても、どうかこうにか年が越せた。

それは、それで感謝しかない。

-

どんなに蔑まれても路上にはいつくばり生きている姿は美しい。そんな昭和的な、演歌的なことを言う人は、もはや今は皆無に等しく、時代遅れであるようである。その能力をどう生かすのかなんてことを考える人々も、残念ながらこれまた皆無のようで、救済、救済と上から視線で叫び、そして、制度に流し、フォーマルに、そしてスマートに生きて行くことを推奨するし、それを「自立」だと、言う。

オリンピックがあり、それを機に着飾ってしまった令和の東京の在り方は、とても困ったものである。そして、何でも、忘れようとする。

そこに誰が居たのか、どんな苦労があったのかすら、今の都市は語ってくれない。



行政施策などの対策の歴史も変遷してきた。路上から「自立」までのルールを、生活保護法で対応できない、いわゆる「法外」の部分を描え続けており、路上生活になってしまっ、そこから抜け出したいと言った場合、それが可能なようにはなつた。

社会は、その安心のため、ホームレスを「積極的に放置しない」ことを選ばざるを得なかつた。その結果、ホームレスの数は減り続け、一部公園、路上、河川敷以外は、目立つところには居らず、都心では時間や曜日によってでしか大きく認識されなくなつた。新宿などの都心では「流動」組が主流になつた。

こうなると、社会は、それを覆い隠す目的がほぼ達成できたと思ひ、「放置はしないが、それは本人次第であり、積極的に何かをしない」とのスタンスに変化していく。

そんな中でも、困っている人を見ると、保護だ、福祉事務所だ、と叫んでいる人も多くなつた。そう云う人は、実際の生活も分かつていないし、その先も分かつてなどいない人々なのであろう。それは、それで正しいかも知れないが、役所に押し付けてしまえば良いと云う、都合の良い叫びであつたりもする。

共生と言ひながら、誰しも自分の家の玄関の前には居られたくはない。地域の中で暮らす路上の人々が減っているのは、そんな雰囲気があるからか。どこか自分の見えない場所を役所に紹介してもらひ、文句は言わないから勝手にお前等暮らしたら良い。そうしてもらひたいと云う「中間層」の叫びであつたりもする。

かつて、狩り込みに手を染めた人々は、単なる「善意」や仕事の義務感でやっていたのであろうか？狩り込んだ人が、時を経て、また同じく、同じ公園に居ることもあつたであろう。同じ事の繰り返しを、どのよう感じていたのか？それとも、そこから脱出した人が、年を経て感謝のために訪れるなんてことがあつたのだろうか？

まあ、何かを信じなければやっではいけないのであるが、江戸の時代ならば、「野非人」を「抱非人」にすることへ、どんな苦勞と苦惱があつたのだろうか？

江戸から明治、昭和、平成、令和と、この国の時代が変わつても、個性の時代、共生の時代だとか言ひながら、その実、差別であるとか、同化圧力や、異端の生きづらさと云うものはあまり変わらない。

下層は下層のままである。

が、それがどうした。だから生き、そして、たたかうのだ。



「見守り続けること」。これは、何だか簡単なようで、それは、それでとても難しい。その地で生活するとか、就労するとか、定期的に行くであるとか、まず、その地に執着をしなければならぬし、実際にその地に行かなければならぬ。リモートは無理である。そして、何かがあつたときには、語りあひ、そして、それなりの対応をしなければならぬ。いざと云う時のためにも、その地の行政機関とも顔をつないでおかねばならぬ。その上で、始めて「見守る」ことが出来る。単なる興味本位ではなく、同じ高さの視線で、その人々を見守る。

見知り合いともなれば、それは挨拶であるが、そこは極めて簡単で、「おう！」「やあ！」「元気？」の世界で、「巡回相談」なんていう高尚で立派な仕事のレベルではない。

けれど、それが必要であつたりする。

そして、何と云つて励ますのか？「福祉が何とかしてくれる」ので「生活保護を申請しなさい」。

否、それでは役所の人と一緒にである。

自分の言葉で、あなたはこの社会は生きる価値があると、生きることはお荷物でも何でもないと、役人でない私たちは語らなければならぬのである。この社会はどうしようもないが、それでも同じ立場の仲間なら大勢いるのだと、語り、励まさなければならぬのである。

その言葉が出ない時は、「メロンパン」をそつと置き、無言の励ましをしよう。

それは、きっと、通じるから。

(了)

医療班 越年期集中活動報告 2021-2022年

医療班の越年期の活動は、以下のスケジュールで活動した。

- 12月26日（日） おにぎりパトロール及び夜間パトロールに同行し訪問健康相談
- 12月29日（水） 高田馬場の連絡会事務所での餅つき会場で机だし健康相談
- 12月31日（金） 中央公園の連絡会年越しイベントで机だし健康相談
- 1月2日（日） 中央公園の連絡会炊き出しで机だし健康相談、夜間パトロールに同行し訪問健康相談
- 1月4日（火） 新宿福祉申請付添

医療班参加ボランティア 延べ28名：医師6、歯科医師1、看護職2、薬剤師2、社会福祉士1、一般1

12月26日	東口ルート	西口ルート	明治公園ルート	深夜パト	合計
野宿総人数：	53	75	8	80	136
				(深夜パトは合計に含めず)	
医療班対応者数：	7	33	5	22	67
血压：	0	3	5	0	8
診察：	0	0	0	0	0
紹介状：	0	0	0	0	0
薬：	7	29	2	22	60

	12月29日	12月31日	1月2日	総合計 (12/26-1/2延べ数)
医療班対応者数：	33	17	7	138
血压：	6	6	5	25
診察：	0	1	1	2
紹介状：	0	1	1	2
薬：	27	13	4	117

提供薬：風邪薬55、鎮痛薬12、胃腸薬33、湿布31、軟膏29、マスク8、絆創膏20

診察し紹介状を記載した2名の相談概要は以下のとおりです。

12月31日 40代男性 新宿以外の特別区で生活保護受給中、義歯がとれた。正月明け当該区に自分で医療券を申請して歯科受診予定。

1月2日 60代男性 高血圧治療中断 (170/104)、胃もたれ持続。1月4日新宿福祉医療保護申請予定。

2022年2月28日 新宿保健医療班 大脇甲哉



パトロール活動 冬の実績

この冬も新宿の街中を歩き、多くの仲間と出会い、「おにぎり」を渡したり、「毛布」や「非常食」や「ホカロン」を渡したり、「チラシ」を渡したりと、見守り活動、巡回相談、を仲間の力で行いました。
路上の仲間の数は減少傾向で、その分、じっくりと、ゆっくりと回ることが出来ました。

新宿連絡会パトロール班

おにぎり巡回パトロール 11-2月実績

		都庁	西	公園	東	小計		周辺部	戸山地区	合計	
							(前年同月比)				(前年同月比)
2021	11月7日	62	16	12	54	144					
	11月14日	59	15	17	54	145					
	11月21日	60	13	13	59	145					
	11月28日	63	16	15	46	140					
	11月平均	61	15	14	53	144 (▲13)	9	8	161	(▲27)	
	12月5日	59	15	8	25	107					
	12月12日	63	16	12	37	128					
	12月19日	71	11	5	36	123					
	12月26日	62	13	15	38	128					
	12月平均	64	14	10	34	122 (▲32)	8	9	139	(▲15)	
2022	1月9日	56	18	16	39	129					
	1月16日	60	17	12	43	132					
	1月23日	67	15	17	30	129					
	1月30日	70	12	17	35	134					
	1月平均	63	16	16	37	131 (▲12)	8	7	146	(▲15)	
	2月6日	57	18	11	34	120					
	2月13日	55	19	15	32	121					
	2月20日	56	19	14	34	123					
	2月27日	60	13	15	34	122					
	2月平均	57	17	14	34	122 (▲19)	8	7	137	(▲25)	
									4ヶ月平均	146(▲16)	

越年越冬 深夜巡回 (パトロール/毛布配布) 活動で出会った仲間の数

2021-2022											
日時	天候	4号街路	都庁	公園周辺	西口地下	西口地上	御苑	東	大ガード	新南口	深夜計
12/12-13深夜	晴	22	25	6	48	18	3	0	4	26	152
12/26-27	晴	20	23	6	45	15	3	0	5	12	129
12/30-31	晴	13	23	7	50	8	3	0	4	12	120
1/2-3	曇	13	23	6	55	9	3	0	3	9	121
1/23-24	晴	22	25	5	48	15	3	0	2	15	135
2/13-14	雪	20	23	5	56	13	2	0	1	16	136
2/27-28	曇	22	17	5	53	9	2	1	1	11	121
									平均	127名	前年比▲39名

年 末年始の炊出し等イベントも無事終了。今年の春も頑張ります。

今期の越年は高田馬場と新宿中央公園のW拠点。そこを車でつなぎあわせ、炊出し、毛布、防寒着類等の物資の提供、戸山公園地域と新宿駅周辺地域を中心としたパトロール。調子の悪い仲間は高田馬場で宿泊、年明けに新宿福祉事務所へと云う、支援の「てんこ盛り」のような越年となりました。

29日は恒例の高田馬場での「餅つき大会」。会場の都合で今回が最後となる餅つきには、120名程の仲間が今年も集まり、路上の仲間の数は減っても、連絡会の繋がりがだけは減らずに続いて行く。そんな越年オープニングとなり、勝手知った旧知の仲間と、団結餅つき。酒も振る舞い、大変な賑わいとなりました。

30日からは高田馬場では衣類テント。そして、炊出しの調理作業。衣類やら何やらを中央公園に、えっちらえっちらと運び、今度は中央公園にテント設営。夕方から防寒着放出。そして具材を暖め直し、熱々の昔ながらの「炊出し」。長野の「山谷農場」や新潟の「いろりん村」などから頂いたお米を使い、30日は牛井、大晦日はモツ煮込み、1日は親子丼、2日は麻婆丼、3日はカレー丼。かつて池袋の炊出しで腕を振っていた仲間が、

病気の身体に鞭を打ちなが作ってくれた懐かしい味の炊出しを、皆に振る舞いました。人数は平均して100名前後。

昨年は何故か多かった大晦日のイベントも今年は100名程度。恒例の「さすらい姉妹」による路上劇、五十嵐正史&ソウルブラザーズによるライブ。そして、レンタルトラックの荷台側板をスクリーンにした紅白歌合戦上映、その合間に「年越し蕎麦」や「お神酒」と、何も変わらぬ新宿の年越し風景が今年も行われました。

毎年、「コロナ」による「規制」はぎりぎりのところからかからない不思議な越年ですが、もちろん感染対策はしっかりとし、守るものは守り、勝手にやるところは勝手にやって、路上飲みもおおいに薦めてと、そんな破天荒な越年ですが、祭りは祭り。後片づけはしっかりとやって、公園には迷惑をかけず、3日の夜、撤収をしました。

以降、高田馬場の事務所を拠点に越冬後段の日常活動、おにぎり作り、物資整理と配布、そしてパトロール活動を進めています。

今年は結構愉しかったので、花見でもやるかとはなっていますが、「コロナ第6波」でどうなるのか。お互い、気をつけましょう。

新宿連絡会 会計報告

この冬、多くのご寄付を頂きました。私たちの取り組みへのご支援、大変ありがとうございます。

新型コロナウイルスの流行が断続的に続き、第6波は長期化しようとしています。今回は施設やらで感染する仲間も多く。その多くが基礎疾患をもっているの、とても心配をしております。

支援のお金も多く頂きました。物資も相当の数、集まりましたので、それらを繰り越し、しばらくはどうにかなりそうです。物資等の支援に関して当会ホームページでその都度必要なものが更新されますので、そちらを確認して頂ければと思います。春からも引き続き、宜しくお願い致します。

2021年度 11月～2月新宿連絡会収支報告

勘定科目	金額	勘定科目	金額
I 計上収入の部		消耗品費	29,496
1 寄付金収入	2,036,284	事務用品費	49,995
		事務所費分担金	120,000
計上収入合計	2,036,284	衛生管理費	0
		支払手数料	29,656
II 計上支出の部		車両費	34,644
1 事業費		修繕費	0
おにぎり/炊出し事業	222,292		
越年越冬事業	698,509	計上支出合計	1,493,175
その他活動事業	94,703	計上収支差額	543,109
2 管理費		前期収支差額	102,791
旅費交通費	24,000	次期繰越金	645,900
通信費	189,880		

●活動カンパ 振込は 郵便振替口座00160-6-190947「新宿連絡会」まで。

●郵便物、物資カンパの送付先は以下の住所にお願いします

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-6-10関ビル106号 新宿連絡会 宛てでお願いします。